

浦和監獄川越分監における郊外散策に関する考察

末 松 恵

はじめに

浦和監獄川越分監は、1902(明治35)年、日本においてはじめて成人囚から幼年囚⁽¹⁾を分離する目的で設置された特設監(懲治場)である。川越分監は「幼年監の実験」(小河1903:28)と位置付けられ、収容児童の保護と更生にかかわるさまざまな取り組みがおこなわれていた。そして、「浦和監獄川越分監」に代わる「川越児童保護学校」という名称を自ら採用・命名したことに象徴される先覚性と独自性は、その後の少年行刑及び感化教育等に大きな影響を与えるものとなった。本研究では、浦和監獄川越分監で展開された多方面にわたる実践のなかから、郊外散策⁽²⁾について取り上げ、これを処遇方針における心性の啓発・身体鍛錬という考え方に着目して考察しようとするものである。非行や犯罪に関与した児童らに対して「世に処して独立独行たらしむる」(川越児童保護学校1908:4)という理念の下、どのような実践が遂行されたのだろうか。その取り組みの詳細を明らかにすることは、児童福祉という活動の源流を考える上でも意味のあることと考える。

1 研究の目的と視点

本研究の目的は、浦和監獄川越分監において実施された郊外散策に関し、どのような人々が、いかなる目的・方法をもって当該活動に取り組み、どのような成果がもたらされたのかを明らかにすることである。それらの解明にあたり、

一次資料を用い、散策の行程や時間、見学場所・行動内容について、できる限り具体的に再現することを目指す。また当時、幼年囚がどのような存在として捉えられ、いかなる方向性が掲げられたのかを監獄関係者・分監教師らの言説から検討し、郊外散策が実施された背景について考察する。

明治期幼年監における郊外散策について論じた先行研究は、管見の範囲では見いだせないが、少年行刑史にかかわる諸研究において言及がなされている。まず、監獄制度の歴史的変遷を論じた代表的な文献である刑務協会編『日本近世行刑史稿 下』(1943)では、幼年監で展開された教育処遇について「極めて進歩的なもの」と指摘するとともに、「職業的知識の授与並体操訓練を重視し、殆ど現今少年院に於ける教育に均しかった」(刑務協会編1943:903)と評している。また川越分監の学科教育については、「教科目は大体小学校令に準拠せるも、新に体操、遊戯、兵式教練等を課し、月に二回の監外運動も行い児童の心性陶冶に注意した」(同上)と記し、「監外」での活動に着目している。また矯正協会『少年矯正の近代的展開』(1984)では、郊外散策が「わが国行刑にとって初めての試みとして意味のあるところである」(矯正協会1984:62)と述べるとともに「やがて後の少年行刑における集団散歩として成長し、さらには累進処遇による構外への進出に連なっていく」(同上65)と記している。重松(1976)は、川越分

監の実践を、保護教育主義、児童の精神的身体的欠陥への治療的処遇主義、勤労と生活指導を重視した家庭主義の3つに整理しており、これらは郊外散策の背景を整理する上で重要である。

つぎに、児童福祉研究においては、倉持(2016)が幼年囚への教育的・福祉的処遇という観点から考察しており、「特別幼年監(懲治場)における感化教育の実践が1908年の感化法改正以降の公立感化院へと継承されていった可能性」(倉持2016:187)に言及している。また、泉(1985)は川越分監では「子どもの立場に立った指導」(泉1985:14)が目指され、「それへの対応として『郊外散策』と『遠足』を実施している」と指摘する。これらの研究から、郊外散策が幼年囚の心身陶冶にかかわる施策の一端を担うものとして重視され、その後の行刑施策や感化事業に影響をあたえていったことが看取される。但し、その具体的な実施方法や背景については詳らかにされておらず、そのありようを明らかにしていく作業が求められている。

他方で、遠足や修学旅行が近代学校教育制度の発達において進展・定着してきたことが知られている。川越分監が「小学校令に違ひ、尋常小学高等小学を併置」(川越児童保護学校1905:30)していたことをふまえると、当時の小学校で実施されていた遠足等に関する研究を参照しておく必要がある。教育史研究の分野では近代初頭における遠足・修学旅行等の形成過程に関する知見が積み上げられているが(浜野2003、加藤2011)、その主要文献として山本信良・今野敏彦(1973)が挙げられる。山本・今野は、遠足の始まりがフランス等の兵式操練を模倣した「行軍」であり、そこで生徒の「精神訓練」が養成されたことを明らかにしている。すなわち、明治10年前後には慰安的行事であったのが、明治18年前後に至り近代的教育内容である体育と結合し、護国の精神養成の道具立ての役

を果たすようになったというのである。また明治20年前後になると、「開発教授理論」の影響から、動植物採集や地理歴史研究など学術研究の要素が取り入れられていったことも指摘している。さらに山本・今野は、これらが各地の師範学校を中心に展開されたことを明らかにするとともに、埼玉県師範学校における遠足が遠足から行軍への移行を示す事例であり、『遠足運動』の先駆をなす」(山本・今野1973:433)と付け加えている。川越分監の実践を担った教師の多くが埼玉県師範学校の出身であり、地元小学校訓導の経験があったことをふまえると、これは興味深い指摘である。また、山住(1987)では「遠足や修学旅行が、(中略)神社仏閣をはじめ名所旧跡を訪ねることにより、敬神崇祖の念、尊王愛国の志気を高める学校行事とされた」(山住1987:63)と考察されている。これらの研究から、学校教育における遠足活動が「護国」や「愛国」といった国家思想を背景とし、心性涵養と身体鍛錬及び修学的な意図をもって実施されたことが示唆される。

本研究ではこれらの知見をふまえ浦和監獄川越分監における郊外散策について検討をすすめていく。

2 研究方法

本研究は史資料・文献に基づく実証的な研究である。具体的には、浦和監獄川越分監(川越児童保護学校)編纂による『保護児童の研究』(明治38年調査、第二回報告、第三回報告、第四回報告)を中心として史実を整理するとともに⁽³⁾、監獄事業の専門誌である『大日本監獄協会雑誌』・『監獄協会雑誌』等を精査し、幼年囚処遇に関連した事象を把握する。また研究の対象期間は、浦和監獄川越分監が幼年監(懲治場)に指定される1902(明治35)年から、刑法改正と監獄法の施行により懲治場が廃止される1908(明治

41)年までとする。

なお、本研究は歴史的研究であるため、用語については当時の文献で使用されていた表現をそのまま用いることとする。また、資料引用の際には旧字・異体字・カナなどを適宜あらためた。

3 研究の結果

(1) 明治期の幼年囚処遇における教育処遇の進展

明治期後半、日清・日露戦は膨大な窮民を生みだし、「無告漂浪の無頼児は、社会文明の進歩と共に、殊に都会熱鬧の地に於て此年益々増加」(小河1897:13)するという状況にあった。こうした中、幼年囚の累犯・再犯問題は社会統治上緊要な課題であるという認識が高まり、幼年監の独立設置が主張されるようになる。本節では、監獄事業において幼年囚がどのように捉えられ、いかなる処遇方法が策定されていったのかを概説する。

1) 幼年囚処遇の捉え方

——「治療に充分なる望みある者」

1892(明治25)年内務省警保局長清浦奎吾は、獄事懇談会において欧州監獄の視察について報告しており、その発言内容から幼年囚処遇の考え方の一端が示唆される。清浦はまず、「幼年者は(中略)実に末に楽しみある身体」(清浦1892:1)であると述べる。しかしながら、現在の待遇は「実に驚くに堪えたる(ママ)有様であって(中略)、ほったらかしで置ては、将来如何なる種子を蒔くであろうか」(同上)と案じている。また清浦は、幼年囚を「初期の肺病者」と表現し「其治療の方法に依りまして充分回復する見込があるもの」と述べている。他方で、教誨師は犯罪という伝染病人の医者であり、その説教は病根を治療する薬剤であるという。明治20年代にあっては、幼年囚は「治療」の対象

者とみなされ、収容の別異によって成人囚からの「伝染」を防ぐとともに、教誨や説教などによる「回復」が目指されていたことが読みとれる。こうした犯罪=病気、犯罪者=病人という例えは各方面で散見され、司法官で東京市会議員も務めた曲木如長も「普通教育と犯罪予防」に言及するなかで、「此幼年囚や懲治人は犯罪という一種の病に罹りましたものでありまして、其病の重くならない内、即ち初期の内に十分手当を致しますれば、ずいぶん回復するものであります。若し其儘打遣って置きますと終身不治の病となるものであります」(曲木1893:13)と述べている。

この他に幼年囚は、「罪犯の卵子」(不詳1891a:34)とも言い表され、警戒されるべき存在でもあった。したがって「卵子なれば未だ孵化せざるに先だち、之を滅却するは罪犯予防の良手段」(同上)であり、成年囚との同房・同役は「最も忌むべき事」(同上)と認識されたのである。

2) 監獄教育の推進

——監獄則における教育規定の変遷

「治療に充分なる望みある者」として成人囚からの分離が主張され、犯罪と教育、累犯と無就学との関連が強調されるなかで、いま一つ、幼年囚への「治療」法として期待されたのが監獄教育であった。1881(明治14)年監獄則が改正され、その第94条に「懲治人には毎日三四時間、読書、習字、算術、度量、図書の科目中に就き之を教うべきものとす」と明記された。刑務協会は、「これ我国監獄教育に関する規定上の濫觴である」(刑務協会編1943:804)と記するとともに、その理由について、「懲治人の智識を開発し、悔過遷善の念を発起せしめんとするの趣旨」(同上)と説明している。

さらに1889(明治22)年改正では、「囚人一六歳未満の者及懲治人には、毎日四時間以内、読

書、習字、算術を教うべし」(第31条)と規定され、新たに「一六歳未満者」を教育の対象者として組み入れている。また内務省は同年、訓令第29号を通知して「教誨師の職務」を定め、「懲治人の就学年月、卒業の科目、学業の優劣等を簿冊に記載し典獄の検閲に供す」(32条)(刑務協会編1943:217)ことを定めた。この時期に前後して、各県監獄署では、就学規則・授学細則などの整備が開始されている。

監獄則は1899(明治32)年にも改正がおこなわれ、「幼年囚懲治人の教育は小学程度に依り、修身・読書・算術・地理・歴史・習字・体操・其他必要なる学科を授くるものとす」(施行規則92条)と定められた。ここに初めて、「小学程度に依り」という文言をもって尋常小学校に準ずる教育の実施が表明されるとともに、地理や歴史とともに「体操」が新科目として監獄教育に加えられた。また1903(明治36)年には、監獄官制において教師が正式な職位として置かれ、判任待遇とされた。これは川越分監が幼年監に指定された翌年のことである。

3) 幼年囚処遇における「身体鍛錬」の要請

明治32年監獄則において幼年囚の教育科目に「体操」が導入された。このことの背景にはどのような議論があったのであろうか。監獄雑誌において最初に「体育」に関する記述が見いだされるのは、1891(明治24)年の「幼年囚の役業に付ては殊に体育上に注意あらんことを望む」(不詳1891b:16)という記事である。ここでは、幼年囚は「将来社会の重要なる分子」(同上)であるがゆえに、「之を使役する上に於て其体育には殊に注意を要す」と述べられている。すなわち、幼年囚の役業は「藁打ち若くはマッチ軸揃え等」の「終日坐作」であり、幼年囚の感化上、体育上において、「役業に最も適当なる農事」に就くことが稀であると主張されているのであ

る。そして「体育に至りては、措て顧みざることも今日の通弊」(同上)と批判している。

幼年囚の身体状況と体育に言及した記事は、明治30年代に入るとその数が増してくる。例えば、監獄則改正前年の1898(明治31)年には、「殊に体育上の注意に至りては殆ど皆無の姿にて、近頃漸く体操を教ゆる向きあるも、徒手運動のみにて器械を用ゆるは稀れ」(不詳1898a:22)であり、「監獄内学校教育、今日の有様は、遺憾ながら概して不備不完たるを免かれず」と主張している。しかしその一方で、体操の実施にかかわる好成績も報告され、「未丁年囚若しくは懲治人に対して身体の鍛錬を要せんが為めに、近頃多くの監獄に於ては体操を為さしむるを例と為せしか、其成績頗る良好にして、身体の姿勢を正し発達を助け、其精神の快活を促し授学上其の進歩の程度も著し」(不詳1898b:30)と評されている。

他方で、河野(1899)は行刑の身体への影響について指摘するとともに精神面との関連について考察している。河野は幼年囚作業の多くが座作であり手指の動作にとどまっていることを取り上げ、このために身体各部の発達成長が為しえず、身体発達が抑制されていると述べる。すなわち、「監獄に於て幼年より成長せしもの」は「体軀短小にして往々姿勢醜悪」であり、常人と異なる所があるのは、「身体生育期間に於て体育の欠乏という事が重なる原因」ではないかというのである。これに加えて河野は、「健全なる精神は健全なる身体に存す」という格言を挙げながら、「精神を活発旺盛にし、規律を守り、命令を重んずる習慣を作り、剛毅にして難事に堪うる志気を養成せんには、身体を鍛錬すべし」と主張している。

1901(明治34)年、司法大臣清浦奎吾は典獄会議で演説し、「幼年囚教育の要は、体育・智育・徳育をして完全に発達せしむる」(清浦1901:8)

と訓示した。ここに、これまでの一連の議論を経て、「体育」が幼年囚処遇の柱の一つとして関係者に認知されたことが理解される。

(2) 浦和監獄川越分監における幼年囚処遇 ——心性と身体への着目

川越分監における郊外散策は「精神休養、気質鍛錬、及修学等の目的」(不詳1904:57)をもって実施され、「愉快に且つ無事に満足に其目的を遂げ」(同上60)たと記されている。本節では、郊外散策という活動がどのような処遇方針の下に実施されたのかを整理する。

1) 川越分監における教育体制の概要

はじめに、川越分監における教育体制についてその概要を述べる。川越分監には、東京・神奈川・埼玉・群馬・千葉・茨城・栃木・静岡及び山梨の諸府県から8歳以上満16歳未満の男子の懲治人及び幼年囚が収容され、1905(明治38)年の在監者は158人と報告されている。『保護児童の研究』第二回報告では、収容者の特徴を示すものとして、「全然無教育の者100分の27.2」

(川越児童保護学校1906:7)であり、「凡そ百中七十は父母共に存在せざるもの」(同上9)と記されるとともに、「百中凡そ五十は、耳鼻咽喉の病を有したるもので、(中略)これらの疾病は直接脳に影響し、以て心理的活動の障碍を起こす」(同上)と報告されている。また、収容児童らへの教育課程は小学校令に準拠し、午前中は農業科・工業科などの実業教育、午後は毎週18時間～24時間の学校教育が、尋常科1年～4年、高等科1年～4年、補習科において、それぞれおこなわれている(表1参照)。

ところで、教育主任山本彌四郎の解説によれば、「体操、遊戯、音楽の教科は、心身の訓練上須要と認め特に其教授に重きを加えたれば、該教科は程度も高く教授時間数も割合に多く」(同上58)設定され、郊外散策は、毎月1回、時としては月に2回取り組まれていたという。

また、教師は「教育に経験のある者を選びて教育主任となし、外に農業、工業、体操、音楽等各専門の教養ある人物を招致して心身の陶冶訓練を図った」(刑務協会編1943:903)と記され、教育主任を務めた4名(金子良助・松中佐平・

表1 教科課程表並に授業時間数

	尋常科(毎週教授時間)				高等科(毎週教授時間)				補習科 (毎週教授時間)
	第一学年	第二学年	第三学年	第四学年	第一学年	第二学年	第三学年	第四学年	
国語科	10	10	10	7	4	4	4	4	4
算術科	6	6	6	5	2	2	2	2	2
歴史科	—	—	—	—	1	1	1	1	1
地理科	—	—	—	—	1	1	1	1	1
理科	—	—	—	—	1	1	1	1	1
図書科	—	—	—	—	1	1	1	1	1
唱歌	3	3	3	2	2	2	2	2	2
体操科	2	2	2	2	2	2	2	2	2
遊戯科	3	3	3	2	2	2	2	2	2
英語科	—	—	—	—	2	2	2	2	2
合計	24	24	24	18	18	18	18	18	18

出典：川越児童保護学校(1906)『保護児童の研究 第二回報告』をもとに筆者作成。

高師佐太郎・山本彌四郎)は、いずれも埼玉県師範学校の出身で川越町高等小学校の校長や訓導を務めた経歴をもつ。また、体操科教師吉野賢司は日本体育会体操学校を卒業した県立尋常中学校の教師であった。これら各専門の教師とともに校医と教育顧問(上田久吉：東京高等師範学校付属学校訓導)を擁し、これを浦和監獄典獄早崎春香と川越分監長早川直亨が束ねるという体制であった(川越児童保護学校1905)。また教師らの他の活動として、児童保護会の取り組みがあった。そこでは毎月教師らが「応分の拠金」をして、家庭や帰住地のない者のための職業の斡旋等を行っており、この資金は、「公費を求むるに途なき春秋二季の体育運動会の施行、又は遠足運動等の費用を支弁する」(同上1906：51)ためにも用いられたという。教師らの保護児童に対する配慮と教育処遇への意気込みを察することができる。

2) 川越分監における児童保護思想

これらの教育体制は、浦和監獄の典獄である早崎春香のもとで組織された。ここでは、早崎らが非行や犯罪に関与した子どもをどのように捉え、いかなる考え方で処遇に取り組んでいたのかを概説する。

まず早崎は、収容児童は「保護の必要」な者であり、「児童を罪惡より保護するより先なるはなかるべし」と述べる(池田1987)。そして、幼年監の設置に関しては、感化法制が「年をも取らず、実をも結ばざる」という状況がつづくなかで、「我等は教育の力に依りて或程度までは罪惡を予防し又矯正し得べき確信と、また、児童を研究して希望とを有」(同上24)すと述べている。早崎は、個々の児童の生育環境や就学状況さらには心的状態・体的状態等を細かく調査し、その結果をふまえて、児童は監獄(懲治場)には入れず、教育や治療をほどこすこと、ま

た「国家自ら責任を尽くすこと」(同上37)の重要性を主張する。ついで、分監長早川直亨は収容児童の多くが、「保護者の保護より離れつつ、宛然孤状の境遇に在」る者であり、他家奉公によって教育の機会なく苦役に耐えるなかで、「遂に遺棄の状態」に至ったと説明している(川越児童保護学校1905：5)。したがって、「児童が如何ばかり周辺に苦めらるゝかを認識し、児童を斯の苦境より救出すは我らの一大義務」(同上20-21)であり、国家、社会、家庭及び個人が児童の保護に向けて努力すべきであると述べている。さらに上田教育顧問は、幼年監に収容される児童の存在に関し、社会や国家へと視線を向ける。上田は、「此等の児童は、如何にしてかくも保護を受けねばならぬ程、不幸な身分とはなりしか」(川越児童保護学校1906：5)と問題提起し、「之を作るに至った社会、亦その責に任じなければならぬ。社会は多くの罪惡を産み出す」(同上6)と述べている。さらに、不就学児童の存在について取り上げ、「国家の制度は、亦多くの犯罪を作るという悲しき現象を否定することが出来ない」(同上)と述べて、教育体制の在り方にも言及している。

これらのことから、川越分監では収容児童の個々の境遇が詳しく調査され、児童の幼年監への収容が、家庭環境のみならず、社会やさらには教育制度の在り方を背景とするものであるという認識のもとに実践がなされていた。そして教育と治療をもって「将来彼等を秩序的有用の国民たらしめる」(川越児童保護学校1905：8)ことが企図されたのである。

3) 教育処遇における「訓育」

——心性の啓発と徳性の涵養

こうした処遇体制の下、郊外散策はどのような活動として取り組まれたのであろうか。学科教育と並んで重視されたのが「訓育」という処

遇上の項目であった。山本教育主任は報告書中に、教授と訓育とは「恰も鳥の両翼」であり、それらが「相俟って教育の目的を達する」と述べている。そしてその「訓育」に関する記述のなかに、郊外散策についての報告が見いだせる。

山本はまず、収容児童とは「他人の誘惑に迷いたるもの」(川越児童保護学校1905:34)であり、「之を教養して国家の良民たらしむる」ことが教師の「大義務」とであると記す。つづいて、散策活動に関し、「彼ら児童は、一構内に家庭と学校とを与えられたれば、彼等の見る所、聞く所の事物に変化なく、自然外界の事物に妄想を起こさん事を慮り、時々遠足散策遊泳等を為さしむ」(同上35)と述べている。そしてさらに、「之れ只に妄想を予防するのみならず、生徒の欲望を満し、尚郊外に手を取り談笑の間に生徒を融和せしめ、真美の徳を養い傍々、地理歴史理科等の活ける教材を得らる」(同上)というのである。このことから、遠足という活動が、閉鎖的環境におかれた児童らの「外界への妄想」への対処として取り入れられ、同時に、融和や真美などの徳を身につけさせるとともに教科学習の要素も取り入れたものであったことが看取される。他にも早川分監長は、郊外散策をもって、「自然物に対し知識を増し、興味を感じしめつゝ、一面には彼等の情育を助け」(川越児童保護学校1906:35)ること、上田教育顧問は、「児童をして校舎周囲の天地の外に、広大な天地自然、広大な人環現象を察することを得しめる」(同上23)ことなどを意義として挙げている。郊外散策がさまざまな要素を取り入れた総合的な活動であり、とりわけ収容者の「心性の啓発を促す」(不詳1904:57)活動であったことがわかる。

4) 教育処遇における身体への着目

——「心身の二者は密接連関」

他方で、収容児童の身体に対しては、とり

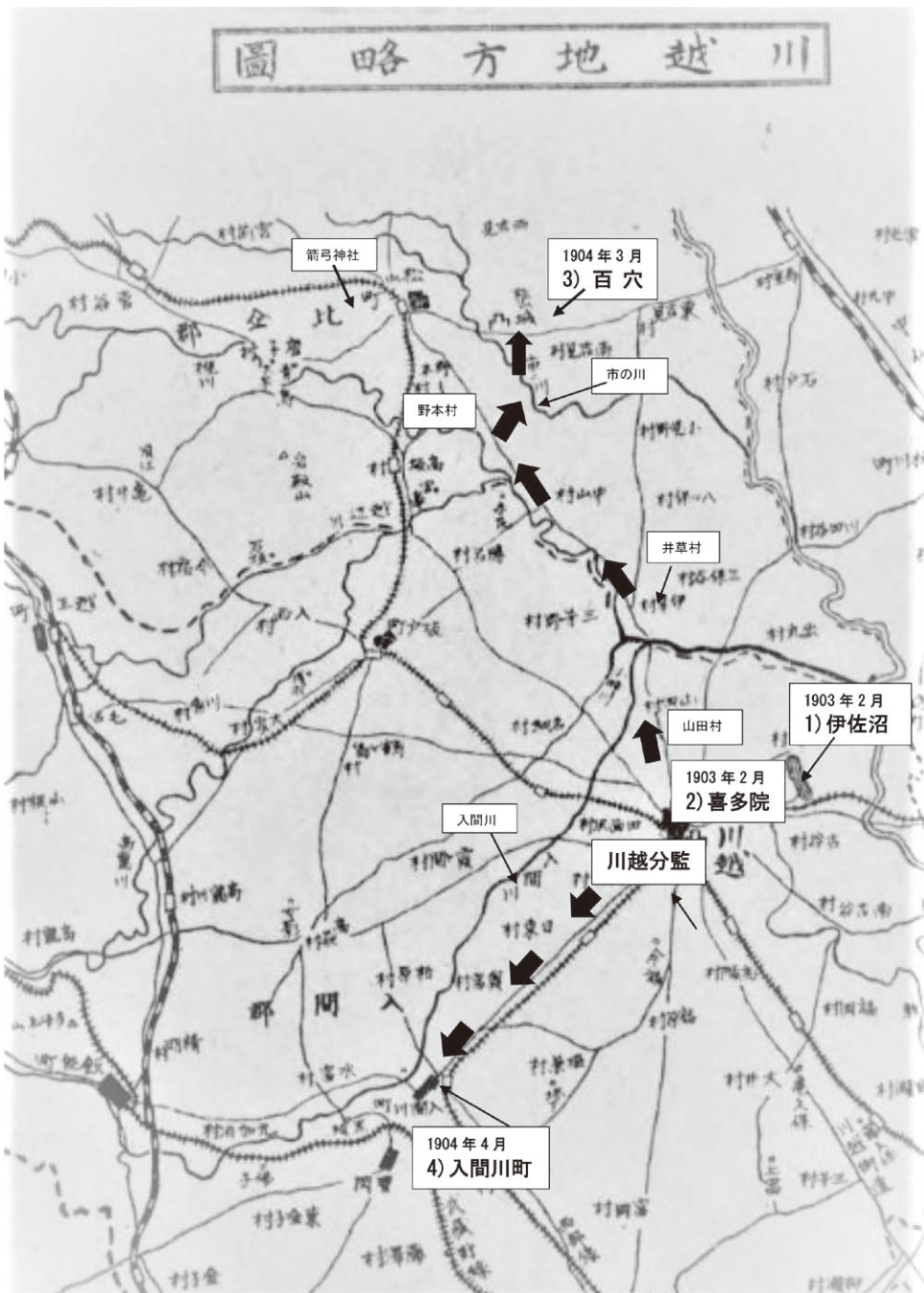
わけ幼年監設置当初より関心が払われていた。1905(明治38)年報告書において、児童の身体は、「憐れむべき状態」(川越児童保護学校1905:6)であると記され、身長・体重・胸囲について「川越町高等小学校児童のそれ」及び「三島博士のそれ⁽⁴⁾」との比較統計が作成されている。説明によると、「体格は不釣り合いに横に張り、高さに延びざるが故に外見上堅横不格好」であり、「共同の念なく粗野にして優美の趣味を含まず」(同上8)と述べられ、「規律ある体操と軍紀的兵式体操を教へ、他日入営準備を為さしめる」(同上)とその方向性が示されている。また、「本校生徒の如く逆境に在りしものは、心身共に順応の発達なく、概ね其心沈鬱、其身体虚弱」(川越児童保護学校1906:61)であり、「薄弱なる児童」に対しては、「須べからく学校の趣味を覚知させ、児童の学校に慣れ、求知心を萌発させる」方針であると記される。

吉野体操科教師も児童の入校時の身体状態を、「十中の八九は顔面蒼色にして頭を垂れ、肩圓く、胸腔を厭迫する為め、多くは扁平にして、何事かを心に苦悶するが如く」(同上96)と言ひ表し、身体を運動させ、体操などをもって身体各部を均整に發育させる必要のあることを報告している。また吉野は、体育の効果は身体のみならず、精神にも影響するものであり、「ロック氏曰く健全なる精神は健全なる身体に宿る」との格言を引用しつつ、「心身の二者は密接連関して相離るべからざる」(同上94)と記している。収容児童の身体状況が注意深く観察されるとともに身体鍛錬が重視され、身体と精神の「調和的発達」に向けて体操や遊戯、兵式体操が取り入れられていったことが看取される。

(3) 郊外散策の実際

本節では、郊外散策の実際のありようをでき

る限り具体的に記すこととし、現在資料上で確認しうる4回の郊外散策に関し、日時、参加者・職員、目的地(距離・時間)、行程、活動内容、児童のようす、関係者の考察等について整理する。



出典：埼玉県立川越高等女学校校友会郷土研究室編(1938)『川越地方郷土研究 第1巻 第1冊』

地図1 全体図

1) 1903(明治36)年2月 伊佐沼方面

郊外散策の第1回は、川越市東部にある伊佐沼という自然沼へ、往復2里弱、1時間半の歩行をおこなっている(不詳1903a)(表2-1・地図2参照)。3人の懲治人に早崎典獄と早川分監長が同行している。早崎は出発前のようすを次のように記している。「帯剣の儘にてはふさはじ、其の他何や彼やとの議論も候えしが、さばかり心配して四方八面申し分なき日を待つは、手足を縮めて亀の子を学ぶに等しと存じ、一切無頓着に、生も早川支署長も帯剣の儘連れ出し候」と綴っている。はじめての散策活動にあたり、帯剣等の監獄官吏然とした、ものものしい身なりを気にするようすが見てとれる。

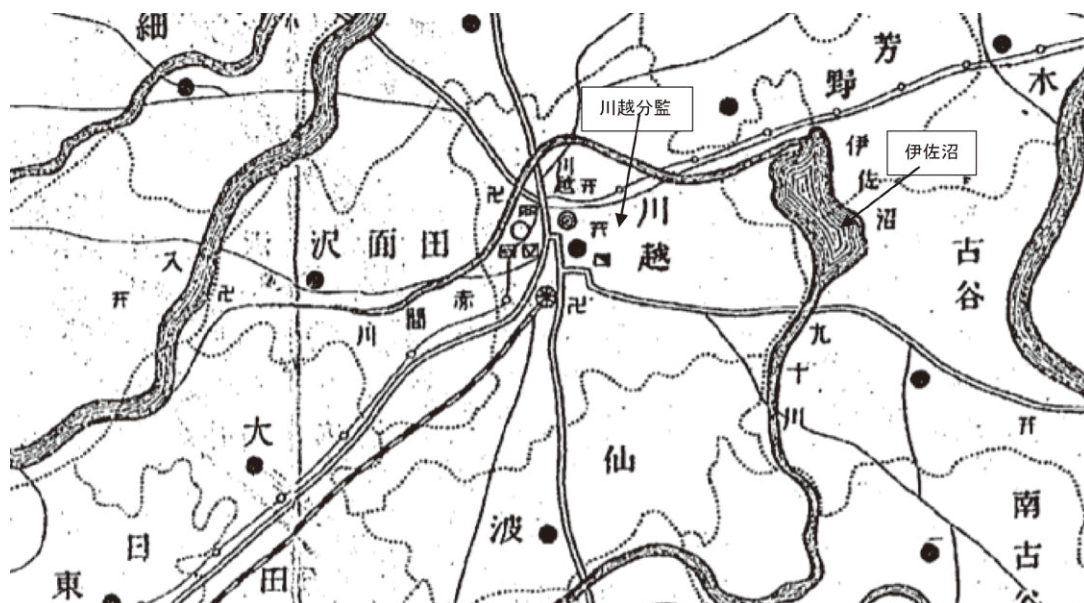
また早崎は、「此散歩につき二つの著しき事柄を見出し」と述べ、1つ目は、「三人共両

手を垂下して行列の順番を潰さざる事」であり、2つ目は「往復二里弱の散歩に唯一言も話をせざる事」であるという。これについて早崎は、規律的に評するならば行儀のいい子どもの歩きぶりであるが、無遠慮に評するならば、「丸で牛の行列など評すこそ寧ろ至当なるべきか」と考察している。さらに懲治人3人が、「歩くときは構わず両手を振れ」と言っても「癖が付て振れず」と答え、「行列の順番潰してよいから子供らしく先になり後になり忤して自由に活発に歩め」と言っても、そうもできず、「快活に面白く話せ」といっても「遂に一言の語を言い交さず」などのようすを捉え、「生(ママ)等は、実にへ動物の如き、唾の如き人間を日常作り出しつゝあることを見出し」と振り返っている。つづけて早崎は、分監での起床時のようすについて

表2-1 郊外散策の概要(伊佐沼方面)

日にち	1903(明治36)年2月	行き先/行程	川越分監⇄伊佐沼往復
参加者/職員	懲治人3人/早崎典獄、早川分監長	距離・時間	往復2里弱・1時間30分

出典：不詳1903a「早崎典獄より第二信」『監獄協会雑誌』16-2、42-43。をもとに筆者作成。



出典：埼玉県入間郡小学校教員講習会編(1898)『入間郡地誌史談』明文堂

地図2 伊佐沼方面

も記し、子供等は早崎に向かって丁寧にお辞儀はするが、「唯一言のオハヨーを言わず、生(ママ)はオハヨーを言えと闇に促せど言わず、子供等は言を典獄に交わしては反則かと信じ居るらしく相見え」る状態であることを記している。

早崎はこれらのことを総括して、「神身(ママ)共に教育時期の最中なる子供等に、歩むにも手を振らしめず、朝もオハヨーだに言はしめず、1日と過ぎ1月と経ぬらむ間に、いつとはなしに哑的人間に変造すること、経世家の須く一考を要する」と提起している。

2) 1903(明治36)年2月15日 喜多院・浮島神社方面

郊外散策の2回目は、早崎が前回と同じ3人の懲治人とともに市内の景勝地である喜多院を目指し、最寄りの浮島神社を經由して帰途についている(不詳1903b)(表2-2・地図3参照)。1回目と異なり、名の知れた人出の多い場所を選んでいところが特徴である。早崎は喜多院が参拝者で混みあうことを予想し、「なるべく市中雑踏の地を避け通行」したという。この時懲治人の衣服が異様であり、帽子を冠っておらず、履物が草履であることなどから、行きかう人びとの注目を惹くことは免れなかったと述べる。しかしながら、「一寸立止り、或はあとからふりかえりてみる位の事」で、格別に支障はなかったと安堵のきもちを漏らしている。懲治

表2-2 郊外散策の概要(喜多院・浮島神社方面)

日にち	1903(明治36)年2月14日	行き先/行程	川越分監→喜多院→浮島神社→田圃道
参加者/職員	懲治人3人(前回と同じ)/早崎典獄	時間	1時間半(午後2時～3時30分)
活動内容	①喜多院五百羅漢見学、②浮島神社池見学		

出典：不詳1903b「早崎典獄より第一信」『監獄協会雑誌』16-3, 44-45. をもとに筆者作成。



出典：田山宗堯(1912)『川越市街全圖』警眼社

地図3 喜多院方面

人の市中での活動を一般の人びとがどのように受け止めるか、その反応を緊張しながら見守っている様子がうかがえる。

また、2回目の散策は懲治人それ自身の変化にも着目しており、「第一回とは、ようよう趣を異にし」ていると綴っている。それは、行列を目立つほどに正すことがなくなり、相互に談話を試みていたと述べるが、とりわけ、喜多院の五百羅漢の面相や池の稚魚の踊るさまなどを見たときの様子であり、「子供の天真をあらわしつゝ、いと面白げにうちえみ申」と記している。第1回散策から2回目にかけて、記述の中で早崎が繰り返し用いていることばは、「子供らしく」である。

3) 1904(明治37)年3月30日 百穴方面

1904(明治37)年3月30日と4月1日には、二つの組に分かれ、それぞれ総勢50名以上の規模で郊外散策が取り組まれている(不詳1904)(表2-3・地図4参照)。金子教務主任は「精神休養、気質鍛錬、及修学等」とその目的を記すとともに、「此の学期末に実行致し度し」と述べており、年度の変わり目の行事的な意味合いをもって実施されたと考えられる。また、二組に分けられたことについては、「松山迄は往復

八里強なれば全体の生徒には到底適せざる」と述べられ、体力的年齢的な要素をふまえて2コースが設定されたことが察せられる。金子の「書簡」からは、いずれのコースにおいても前年度の2回の遠足とは全く様相の異なる「生徒」が描写されている。

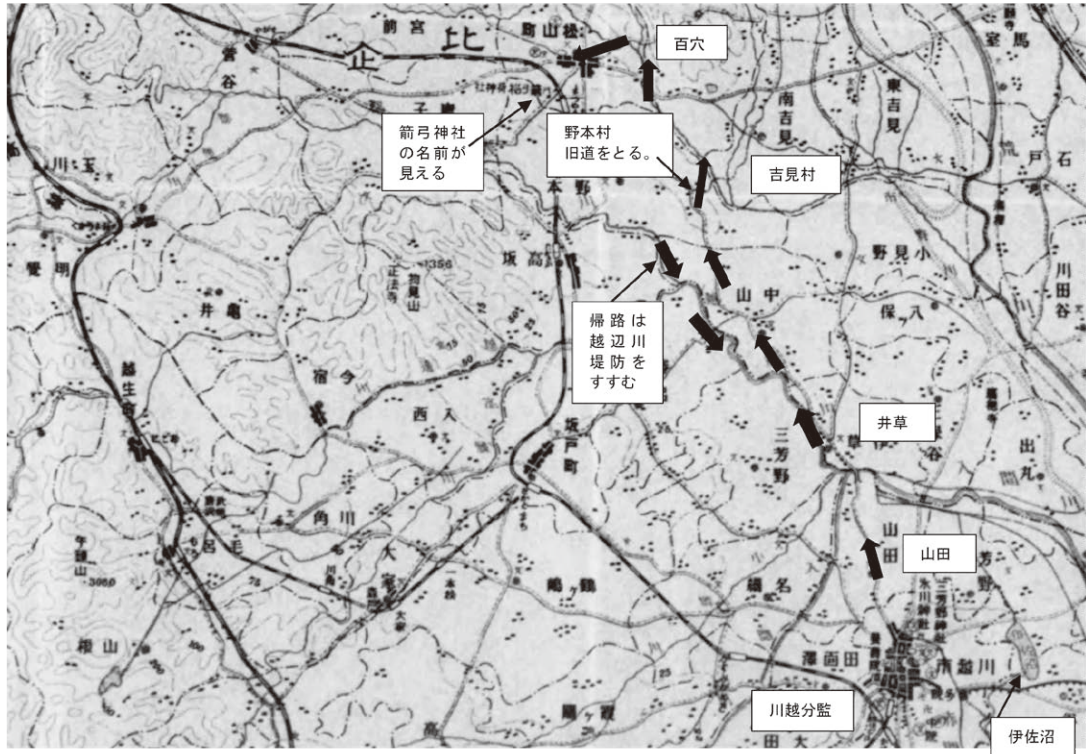
まず、百穴⁽⁵⁾方面行き「甲組」生徒らは「夜の明けざる午前四時頃より目を醒まし、起床の鳴鈴今や遅しと待ち居りしもの、十中七八ありたり」と記される。これについて、金子は「生徒等の如何に楽しく思いしかと想像致され」と綴っている。また道中は、「生徒等は喜び勇みて右顧左眄、彼の山は何、曰く秩父の武甲山、彼は何、曰く浅間日光筑波、曰く入間川、曰く越辺川、生徒と職員の応答交りにして、生徒等の求智心の盛なる一端は自ら談笑の中に表出され」とその様子が述べられる。また、城址における焼米試掘では、「喜ぶものあり、見当たらずして失望せるものあり、無邪気にして愛らしき姿」が見られ、帰路においては、「越辺川の堤防を歩みつつ散歩唱歌を合唱」するのである。前年、伊佐沼往復時には、「一言の語を言い交さず」「丸で牛の行列」と言い表された姿とは異なり、早崎が希求した「子供らしさ」が自ずと溢れ出すさまを金子が捉えている。

表2-3 郊外散策の概要(百穴・箭弓神社方面)

日にち	1904(明治37)年3月30日	行き先	比企郡松山町百穴、箭弓神社
参加者	甲組生徒45名	距離/時間	往復8里強/10時間半(6時~16時半)
職員	岩崎・関・三澤・田口・久下・蔵・山田	服装/携帯品	晴れの衣服・脚絆・弁当・草鞋一足・手帳・鉛筆・手拭
行程	古戦場の塚→入間川を渡る→山田村井草→野本村→旧道をとる→市の川→断崖絶壁の下を歩む→吉見村→岩屋観音(10時)→根来谷城墟→百穴→土器製造所→箭弓神社→越辺川堤防→帰校		
活動内容	①頂上での双眼鏡による眺望、②焼米試掘、③古刀石斧見学、④百穴調査、⑤金子教師による講話(太古穴居住時代)、⑥土器製造場見学、⑦箭弓神社詣で		

出典：不詳(1904)「感化生徒(懲治人)の遠足」『監獄協会雑誌』17-5, 57-62.

※「感化生徒(懲治人)の遠足」は、教育主任金子良助が早崎典獄に書き送った「書簡」、補習科O.K.による「松山町地方の遠足の記」及び高等二学年Y.T.による「入間川遠足運動の記」から構成されており、本表は、その3つの資料を基に筆者が作成したものである。



出典：埼玉県総務部統計課編(1934)『埼玉県勢要 昭和 9 年』埼玉県
地図 4 百穴方面

また、この散策では個々に「手帳・鉛筆」を携帯させ、「修学」の目的も兼ねていた。それは、地域に残る歴史的城蹟の探訪にはじまり、古墳時代の遺構である百穴の調査や古器物の見学、さらには「殿宇壮麗」な箭弓神社の観覧というかたちで行程に組み込まれ、「生徒等」は、教師の講話を「手帳に筆記」したのであった。そして学修活動は、帰校後の「紀行文」の提出というかたちで締めくくられている。

他方で甲組は、百穴までの往復 8 里強を 10 時間半で歩行し、これは明白に日ごろの「鍛錬」の成果を問う取り組みでもあった。金子は、「午後四時半、無事帰校仕り候。然して此の遠足に於て生徒の英気は少しも衰えしものなく、喜び勇みて校内に入り、尚翌日も平日と異なることなきは体育上後の参考となるべきか」とその体

育上の成果を報告している。

これらのことから、郊外散策が、「精神休養」「気質鍛錬」「修学」の要素をちりばめた総合的な取り組みであったことが示唆される。

4) 1904(明治37)年4月1日 入間川町方面

翌日 4 月 1 日には乙組 45 名が入間川町方面に散策している(不詳 1904)(表 2-4・地図 5 参照)。金子は、「此の里程は往復五里半にして、生徒の年齢は十二歳より十七歳迄のもの」「年少者」と記しており、年齢や体力を鑑みて編成されたことがわかる。

乙組の散策もまた、「心神(ママ)自ら爽快を覚え、年少者の割合には活発に勇み進」んだという。そして甲組同様、由緒ある寺社の参拝とその歴史上地理上の講話、農事上の講話とつづ

浦和監獄川越分監における郊外散策に関する考察

き、境内での遊戯では、「快活の動作は一層にして、麗わしき元氣は各生の面に溢れ」たと綴られている。他方で、身体面については、「甲組と同じく少しも疲労などの状なく、此の位の里程は適当に思われ」と述べられる一方で、年少の者が多いため、草鞋の紐が解けたり、袴が脱げたりすることがあり、また、「葦、土筆など見て道草を食うの風あるは、多少甲組と異なる」とも記されている。これらの様子も、一年

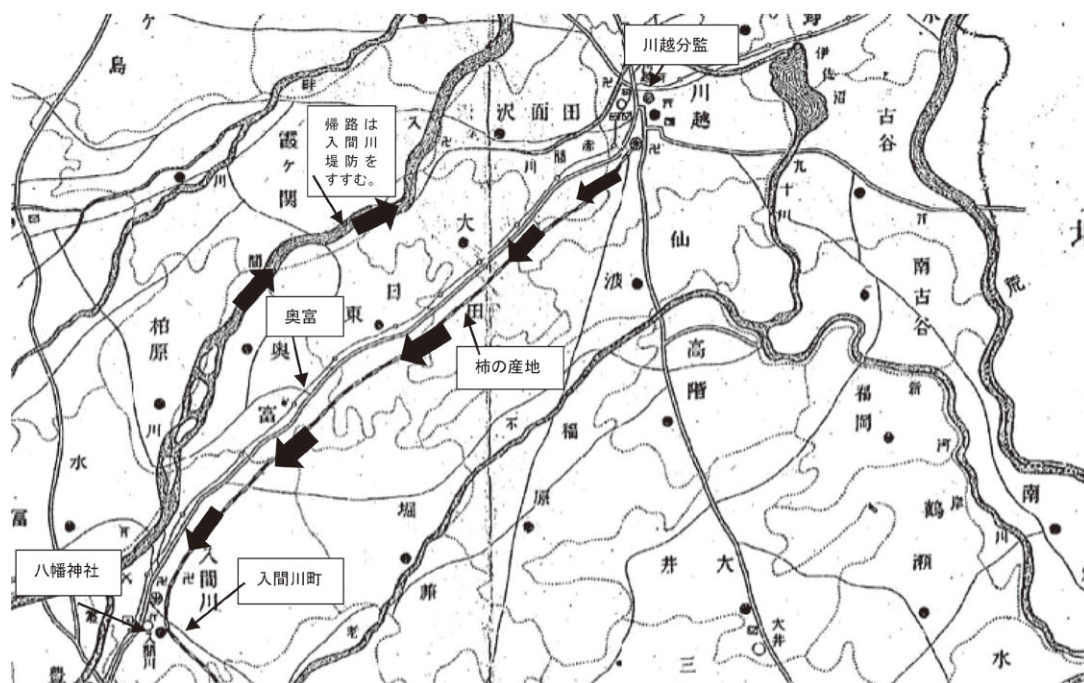
前「動物の如き、唾の如き人間」と表現されたものとの変化を捉え、さらには金子の「年少者」への労りを感じさせるものである。

また金子は市井の人びとの反応についても書き記している。すなわち、「然して、途中我等を見る人、普通の小学校の職員及生徒を以て待遇し、聞き苦しき言葉は少しも耳にせず、生徒等も全く学生たるの意志と見受け申候」と述べている。この描写から、近隣・地域の人びとが

表2-4 郊外散策の概要(入間川町・八幡神社方面)

日にち	1904(明治37)年4月1日	行き先	入間川町・八幡神社
参加者	乙組生徒45名(12歳~17歳)	距離/時間	往復5里強・10時間(6時~16時)
職員	岩崎・関・横澤・田口・久下・蕨・金子	服装/携帯品	「甲組のごとく準備」と記される
行程	(川越入間川間の県道をすすむ)本町→南町→鍛冶町→志義町→六軒町→野田村→太田村→大塚村→原新田→大袋新田→越谷奥富村→(柿の産地)→入間川→停車場(午前9時半)→八幡神社→廣瀬の河原→入間川堤防→小ヶ谷村→内田氏養鯉池→帰校		
活動内容	①八幡神社参拝、駒繋ぎの松見学、②境内で遊戯、③金子教師による八幡神社に関する歴史上・地理上の講話、④蕨教師による農事上の講話、⑤内田氏養鯉池見学		

出典等については、表2-3に同じ。



出典：埼玉県入間郡小学校教員講習会編(1898)『入間郡地誌史談』明文堂

地図5 入間川町方面

懲治人・幼年囚の社会での活動を受け入れ、理解をもって接していたことがうかがわれる。

これらの校外散策を総括し、体育教師吉野賢司は1907(明治40)年『保護児童の研究』において次のように報告している。「遠足の教育上多大なる効果あるは多言を要せずと雖も、本校の如き終始校内に閑居する生徒には殊に必要なるを感ず。彼等を誘いて偶々郊外に出でんか、其の精神を爽快にし、健康を進め且つ見聞を広むること、一日の日課を休みたるの不足を償い尚余りあり。故に、春秋二季には毎月二三回、二里乃至五里の遠き名所旧蹟を探らしむ」(川越児童保護学校1907:91)。吉野は、郊外散策が「精神」と「健康」さらに「見聞を広げる」など知力の習得においても効果があることを明記し、それは「日課」を超える意義ある取り組みであると結論付けている。

(4) 郊外散策の評価とその後

川越幼年監の設置によって、成人囚から幼年囚の切り離しがなされ、教育処遇の取り組みのひとつとして郊外散策が取り組まれた。金子教育主任は、「愉快に且つ無事に満足に其目的を遂げ」(不詳1904:60)たと報告しているが、他の監獄事業者らはこれをどのように評価したのであろうか。

1) 郊外散策の評価

監獄協会雑誌には、川越幼年監の訪探記事がいくつか掲載されているが、ここでは監獄局官僚で監獄事業に影響力のあった印南於兎吉の記述を取り上げる。印南は2回寄稿しており、第1報は1903(明治36)年2月のことである。ここでは、児童らの運動を見学したことを報告し、「其の快活なること、斯くして初めて幼年監の目的を遂行し得べし」(別天生1903:50)と評価する一方で、「(筆者注:児童を)無暗に可

愛がり過ぎては却って児童の為めならざる」(同上51)と忠告し、規律の厳重な励行を促している。また第2報として、同年12月の訪問について記し、そこでは、懲治生のお使いなどの単独外出や「郊外散歩を試むる杯は適當の事」(別天生1904:69)と戸外での活動を肯定しながらも、再度、「今一層紀律的に彼等の惰性を矯治せしむる所ありて可なる」(同上)と述べ、「鞆の樂書」や「頭髮の短薙」などを例にとって、規律の「廢弛」を諫めている。運動や郊外散策などの取り組みは支持される一方で、遊戯や音楽に対しては否定的な見方が強く、「次第に、一部の人びとの眼には破天荒な処遇と映る点もあった」(矯正協会1984:67)という。

また、川越分監には家庭学校長留岡幸助も訪問している。留岡は、「(筆者注:川越幼年監は)未曾有の新思想に基いて組織せられ経営されて居」(留岡1904:6)ると評価しつつ、教育処遇や戸外労役などについて「非情に歓迎してよい」と賛辞をおくっている。しかし同時に、収容児童の衣服が「立派すぎる」こと、「さん付け」であることには苦言を呈し、「幾ら良い事でも余り急劇(ママ)の進歩は悪いことになって来る」ことから、「世の中の進歩」を推し量るよう求めている。

1907(明治40)年、松田司法大臣は典獄会議で演説し、川越分監の幼年囚処遇について「徒に所遇を寛大にするが如きは決して之を設けたる所以の趣旨に副わぬ」と述べ、「飽くまでも厳正質実の要義を保って規律と労働使役とに依り教養感化を加うべく、決して学校的普通教育を主眼とするが如きことなきを要する」(不詳1907:8)と訓示した。また、監獄局長小山温も「監獄は紀律の府」であり、「紀律によって存在する」として、「幼年監獄を感化院とし、或は学校と為したりする」ことについて強く非難した(矯正協会1984:47)。

こうした経緯において、「少年行刑史の中で最も異彩をはなつた懲治人及び幼年受刑者の教育が、突然大木が折れるように終焉に向かった」(同上48)のである。

2) 郊外散策のその後

郊外散策活動はその後どのような経過をたどったのであろうか。1907(明治40)年刑法改正によって懲治場制度が廃止され、川越分監は14歳以上の少年受刑者を収容することとなった。これにより、「教育勅語の聖旨」を指針とし、「規律を守り従順の徳を養」うことを目的とした処遇が推進された(浦和監獄1913)。あらたに着任した三浦典獄の記述によると、「体育には特に留意して休暇日と雖も之を課し、専ら兵式体操を行」(三浦1912a: 21)うとともに、「其外団体遊戯として、徒歩競争、フートボール、帽子取、綱引をやる」(同上)と述べられており、郊外散策は取りやめられたことがうかがわれる⁽⁶⁾。

他方で、保護処分である少年院では遠足が実施されている。1923(大正12年)に設置された浪速少年院では、「情操教育」のなかに「遠足」が位置づけられ、「春秋二季に於て或は運動会を催し一般に公開し、地方青少年との対抗競技を行い、或は遠足を試み、附近の山野を跋涉し名勝旧跡を尋ね、以て現在の特種境遇の位置を忘却して英気を涵養するの機会を與う」(浪速少年院編1937: 20)とその主旨が説明されている。同様に多摩少年院においても、「心情陶冶に資」する目的をもって「遠足、登山、水泳の爲め、少年を外出せしめる」(鮎川2009: 8)と記されている。

さらに感化院では、武蔵野学院(1919年設置)の「本院における教育施設」という項目中に、「運動会、遠足」の文言が見いだされる。そこでは、「保護教育に在りては、学習と労作と鼎立して、遊戯運動に特に重要な位置を与うるを要す。

是れ豈に院的生活を楽しましむるが爲のみならず、実に嬉戯談笑裡に体力を養成し、徳性と智能の啓沃を徹底せしめんが爲なりとす」(社会福祉調査研究会編1990: 71)と説明されており、その趣旨において、川越分監における実践と共通した認識を確認することができる。また資料によれば、当時、地方の感化院においても、遠足が年中行事のひとつとして執り行われていたことがわかる(鈴木2001)。

以上のことから、郊外散策はその後の少年行刑においては引き継がれず、規律の順守と体力鍛錬を目的とした兵式体操を中心とした監内活動にとどめられたことが看取される。その一方で、保護分野である少年院や感化院では遠足が積極的に取り入れられていったことがわかる。

4 考察結論

本研究の目的は、浦和監獄川越分監において実施された郊外散策に関し、どのような人々が、いかなる目的・方法をもって当該活動に取り組み、どのような成果がもたらされたのかを明らかにすることであった。以下ではその問いに対する考察と結論を述べる。

(1) 浦和監獄川越分監における郊外散策の取り組み

浦和監獄川越分監における郊外散策は、1903(明治36)年、3人の懲治人の近隣伊佐沼への2里半の活動として開始された。翌年には、学期末行事として体力年齢に応じた2組・2コースが設定され、それぞれ45名が8里強・5里強を10時間半・10時間かけて散策している。郊外散策は当初より浦和監獄の典獄である早崎春香が主導し、その後、教師らが同行する分監挙げての取り組みとなった。またその費用は、教師らが資金を拠出して運営する児童保護会の経費より捻出され、教師らの強い意気込みの下で推進

された。散策の目的は、「精神休養、気質鍛錬、及修学」(不詳1904: 57)であり、収容児童を教養して「国家の良民たらしむる」(川越児童保護学校1905: 34)ことを旨とし、体育上の意図とともに精神を爽快にし、真美などの徳を養い、さらに歴史・地理・農事にかかわる修学の機会とされた。ここに、先行研究が指摘する明治前半期からの学校教育における「集団遠足」との共通項が見いだせる。但し、幼年囚の「身体」が着目されたことについては、明治20年代から監獄事業者の間で議論され、「将来社会の重要な分子」である幼年囚の「身体各部の発達成長」が重視されたという経過があった。郊外散策は、分監内部では「愉快に且つ無事に満足に其目的を遂げ」たと評されたが、内務省官僚等からは「規律」への背反が強く非難され、刑法改正後の少年監獄においては継承されなかった。しかしその一方で、少年院や感化院などの保護事業においては「特に重要な位置を与うる」(社会福祉調査研究会編1990: 71)活動として取り組まれた。

(2) 浦和監獄川越分監における郊外散策の背景

浦和監獄川越分監において郊外散策が実施されたことの背景として、以下の三点を指摘できる。

一つ目はこの取り組みが「精神休養、気質鍛錬、及修学」という目的とともに、幼年囚が将来「世に処して」生きていくための力を身につけることを意識して実施されたということである。川越分監では学科教育と並んで「訓育」が重視され、「世に処して独立独行人たらしむる」(川越児童保護学校1907: 4)ことが目指された。すなわち、収容児童が「各自に将来に向けて、向上の精神を発揮し、品位自ら上」(同上1)げよう、「其日常の起居、生活、交際、衣服、

言語に至るまで、悉く普通の児童の如くならしめ、敢て彼等をして異様の感を起さしめない」ことが目標とされたのである。それゆえ、郊外散策もまた「世に処」すための試みのひとつとして、児童らが「異様」ではなく地域を移動・散策することが目指されたと考えられる。早崎が児童らに「歩くときは構わず両手を振れ」「先になり後になり抔して自由に活発に歩め」と諭したことや「晴れの衣服」を着せたことにもその意図が表われている。非行や犯罪にかかわる幼年者の「社会」「地域」とのかかわりにおいて、その接点にどのようにアプローチするかという先覚性を指摘しうる。

二つ目は、一つ目とも関連して郊外散策が収容児童の「子供らしさ」を取り戻す活動としても期待され、推進されたということである。しかしこれは同時に、処遇に携わる者が「牛の行列」や「啞的人間」を生みだしていないかどうかを確かめる場でもあったと考えられる。早崎は収容児童を「自然の教師」と言い表し、「右へ、左へと導いてくれます」(池田1987: 108)と記している。このことは、自身の活動の反映としての子ども、という意志を表すとともに子どもの主体性や創造性を重んじる教育思想の影響をうかがわせる⁽⁷⁾。

三つ目は、この取り組みの背景には、地元川越の人々の理解と協力が見いだせるということである。それは金子が記したように途中行き交う人が「普通の小学校の職員及生徒を以て待遇し」たことから読み取れるが、『保護児童の研究』において川越高等小学校児童のデータが提供されたことや、「分監の建物が如何にもひどいので、有志の人が相図って同町大字西町に新築用地一万坪の献納を申し出」(三浦1912b: 19)たことにも示されている。上田は山本の言葉を引用して「川越の市民はきわめて敦厚であって、同校の児童に対しても深く同情の念を

寄せ、その胸襟を開いて之に接す」と述べている(川越児童保護学校1906:4)。川越分監の取り組みが地域の人々の共感を得て取り組まれていたことが推察される。

川越分監の郊外散策は、幼年囚への教育的な処遇における心性と身体への働きかけとともに、彼らが「世に処して」いくための地域における活動という意味で、その先覚性と独自性がみいだせる。

本論文は、科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金:課題番号19K23253)の研究成果の一部である。

【注】

- (1) 「幼年囚」については監獄則及び旧刑法に定義されている。明治5年監獄では「二十歳以下懲役満期に至り悪心未だ悛らざる者」(第10条)の懲治監への留置と「営生の業」の「勉励」が定められた。つづいて明治14年改正監獄則では「但満八歳以上の者は情状に因り満十六歳に過ぎざる時間之を懲治場に留置することを得」(旧刑法79条)、「但情状に因り満二十歳に過ぎざる時間之を懲治場に留置することを得」(同第80条)と定められた。なお、本稿では「特別幼年監」と「懲治場」を同意のものとして扱っている。
- (2) 資料中には「郊外散策」のほかに「校外遠足」「遠足運動」などの表現が用いられているが、すべて同意のものとし本稿では「郊外散策」で統一する。
- (3) 『保護児童の研究』には発行年の記載がないため、報告書表紙に記された「〇〇年〇〇月現在」という表記を発行年に代わるものとして記すこととする。
- (4) 川越町高等小学校は分監の近隣に位置しており、児童の身長・体重・胸囲に関する数値の提供がなされたと考えられる。「三島博士」とは衛生学者三島通良のことと察せられ、「三島博士のそれ」とは小児の発育状況をデータ化した『日本健体小児ノ発育論』中の値を指すものと考えられる。
- (5) 百穴は比企郡吉見町にある古墳時代後期の横

穴墓群の遺跡である。

- (6) ところが、行刑累進処遇令(1933年制定2006年廃止)には「集団散歩」の規定があり、「第1級の受刑者には適当なる場所に集団散歩を為さしむることを得」(第59条)と記される。これは階級処遇制度において、受刑者の努力成果に応じた処遇の緩和を定めたものであり、「第1級」とされる優良者に監外での散歩を許諾したものである。従ってその目的・対象において川越分監における郊外散策とは異なっている。
- (7) 上田は早川分監長を「ベスタロッチ」「フレール」の名とともに紹介している。先行研究は、当時の学校行事としての遠足が「護国」「愛国」といった国家思想を基にした児童の「心性陶冶」(=臣民化)であったことを指摘しているが、早崎の児童観・子どもへのまなざしからは、川越分監における散策活動がそれとはまた異なった意志をもって遂行されたことを看取しうる。

【参考文献】

- 鮎川潤(2009)「多摩少年院の10年」『戦前期少年犯罪基本文献集』日本図書センター。
- 別天生(1903)「東京便」『監獄協会雑誌』16-3, 48-51.
- 別天生(1904)「川越懲治場を観る」『監獄協会雑誌』17-1, 65-70.
- 不詳(1891a)「幼年囚の取扱方に注意すべし」『警察監獄学会雑誌』2-5, 34-35.
- 不詳(1891b)「幼年囚の役業に付ては殊に体育上に注意あらんことを望む」『大日本監獄協会雑誌』43.
- 不詳(1898a)「監獄内の学校教育(一大刷新を要す)」『大日本監獄協会雑誌』121, 21-22.
- 不詳(1898b)「未丁年囚の体操(成績良好あり)」『大日本監獄協会雑誌』127.
- 不詳(1903a)「早崎典獄より第二信」『監獄協会雑誌』16-2, 42-43.
- 不詳(1903b)「早崎典獄より第一信」『監獄協会雑誌』16-3, 44-45.
- 不詳(1904)「感化生徒(懲治人)の遠足」『監獄協会雑誌』17-5, 57-62.
- 不詳(1907)「松田司法大臣訓示」『監獄協会雑誌』20-5, 3-9.
- 浜野兼一(2003)「明治期における埼玉県師範学校

- の遠足・行軍・修学旅行について—法的規定以前の実態に関する一考察』『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊』11-1, 109-119.
- 池田千年 (1987)「ひとり子の園」『現代日本児童問題文献選集12』日本図書センター.
- 泉 順 (1985)「解説」『保護児童の研究(川越児童保護学校編)日本児童問題文献選集25』日本図書センター.
- 加藤一佳 (2011)「戦前における小学校遠足の形成過程及び事故防止対策に関する考察—教師の安全保護義務に関する考察 6—」『明星大学研究紀要—教育学部』創刊号.
- 川越児童保護学校 (1905)『保護児童の研究 明治三十八年十二月末日調査』川越児童保護学校.
- 川越児童保護学校 (1906)『保護児童の研究 第二回報告』川越児童保護学校.
- 川越児童保護学校 (1907)『保護児童の研究 第三回報告』川越児童保護学校.
- 川越児童保護学校 (1908)『保護児童の研究 第四回報告』川越児童保護学校.
- 刑務協会編 (1943)『日本近世行刑史稿 下』刑務協会.
- 清浦奎吾 (1892)「何ぞ天然の園圃を整修せざる」『警察監獄学会雑誌』3-12, 1-10.
- 清浦奎吾 (1901)「清浦司法大臣獄制演説」『監獄協会雑誌』14-10, 1-12.
- 河野藤太 (1899)「幼年囚体育に就て」『監獄協会雑誌』12-1, 36-38.
- 倉持史朗 (2016)『監獄のなかの子どもたち—児童福祉史としての特別幼年監、感化教育、そして「携帯乳児」』六花出版.
- 矯正協会 (1984)『少年矯正の近代的展開』矯正協会.
- 曲木如長 (1893)「曲木如長氏の講話」『大日本監獄協会雑誌』65, 10-13.
- 三浦貢 (1912a)「川越分監少年受刑者の処遇(2)」『監獄協会雑誌』25-5, 17-23.
- 三浦貢 (1912b)「川越分監少年受刑者の処遇(1)」『監獄協会雑誌』25-4, 18-24.
- 浪速少年院編 (1937)『浪速少年院十五年史』浪速少年院.
- 小河滋次郎 (1897)「教育と犯罪の関係(帝国教育会に於て)」『監獄雑誌』8-12, 3-16.
- 小河滋次郎 (1903)「監獄の分類に対する所感を述べて幼年囚の所遇に関する立法、司法及び行刑上の希望に及ぶ(其1)」『監獄協会雑誌』16-2, 19-29.
- 埼玉県入間郡小学校教員講習会編 (1898)『入間郡地誌史談』明文堂.
- 埼玉県立川越高等女学校校友会郷土研究室編 (1938)『川越地方郷土研究. 第1巻 第1冊』.
- 埼玉県総務部統計課編 (1934)『埼玉県勢要覧. 昭和9年』埼玉県.
- 重松一義 (1976)『少年懲戒教育史』信山社.
- 社会福祉調査研究会編 (1990)「感化教育資料」『戦前日本社会事業調査資料集成. 第5巻』勁草書房.
- 鈴木明子 (2001)『感化院の記憶』桂書房.
- 田山宗堯 (1912)『川越市街全圖』警眼社.
- 留岡幸助 (1904)「川越幼年監獄を觀る」『監獄協会雑誌』17-7, 1-22.
- 浦和監獄 (1913)『少年受刑者ノ統計及處遇一斑(明治四十五年大正元年)』.
- 山本信良, 今野敏彦 (1973)『近代教育の天皇制イデオロギー』新泉社.
- 山住正己 (1987)『日本教育小史』岩波新書.